

続

徒然
つれづれ

思い出誌の休刊

桑野 巍

出版業界は不況といわれて久しい。「出版不況から抜け出す即効薬はいまのところ見当たらない」と知識人たちが言い、この業界では危機感が漂っており、行く末を案じる声が強い。それでも毎日の新聞には書籍や雑誌の広告がかなりのスペースを割いているし、まちの本屋の店先には新刊書などが結構並べられているのである。

雑誌類の中でも世間に認知された総合誌の休刊が相次ぎ、マイナストrendに歯止めがかからない状態らしい。大阪に閉じこもっているのは出版業界のことなど「よくわからない」というのが本音なのだが、どうも総合誌とか週刊誌、新聞という紙媒体がネットという黒船に降参してしまった感がしないでもない。同じ活字媒体であっても中身のところで問題のとらえ方や時間的な格差で表現も異なると思うのだが、現代社会に受け入れられる率が低くなりつつあるのが残念だ。

そんな中で私が個人的に加入している年1回刊行の同人誌「はなみち」（本部東京・渋谷）も休刊することになった。もっとも休刊の理由は主宰者の女流劇作家が昨年春96歳で永眠されたからだ。彼女の名は田井洋子（本名丸茂ふじ子）さん。彼女は明治44年東京生まれで日本放送作家協会理事長・著作権委員長などを歴任した。ラジオ、テレビ、舞台の脚本家として活躍され、昭和54年紫綬褒章、同60年勲四等宝冠章を受章された。

夫君は国学院大学文学部教授だった丸茂武重氏（故人）。私と彼女との出会いは彼女の実兄（旧制中学の大先輩で旧時事新報記者）を私が記者道の師と仰いだころからのご縁で同人誌の仲間に入れていただいた。同人誌「はなみち」は今春の34号で幕を閉じたが、彼女から人間の誠実さ、寛容さ、人情の機微、文章を書くコツなど多くのことを教えてもらったことは幸せと感謝している。同人たちの多くはすでに中高年の域に達しているが、このメンバーの中から、いつしか「文学賞」を獲得する作家が誕生すれば、天国へ旅立った彼女も大層喜ばれることだろうと思ったりした。

もう一つの休刊は農林水産省近畿農政局編集発行の「アグリート」（平成15年創刊、季刊誌）だ。発行

部数約7000部だったがこちらは農水省の都合で今春号が最終号となった。「アグリート」は農政や農水産業の動き、食料問題、環境問題などの取組について写真、イラスト、図表を使って地域の関係者に理解を得ることを目的に発行していた。農林水産関係団体だけでなく、農業高校や大学に配布するほか私のような一農業ファンにとっても身近で読み易く、いろいろなデータも教えてくれた。

休刊の理由は「国の財政が厳しいことから」と聞いたが、発行に人手がかかることと活字媒体が先細り傾向とみたのが本音らしい。編集担当者によると、一部の読者から「ぜひ続けて」という声もあったという。特に域内の農業高校からは農業学という学問の資料として活用していたとか、農業研究の情報源として利用していたので休刊は残念という反響もあったと聞いた。これに対し農政局側は「局のホームページを充実させますから、そちらへアクセスして」と答えたという。

農業に関わる問題は食料自給率、食品の安全、飼料確保、耕作放棄地の活用、農業従事者の高齢化、米価など枚挙に遑がない。これらはすべて大問題だ。古くて新しいなんて言っておれないのが現状で、一日も早く抜本策を見出さなくてはならないと行政や政治に物申したい。また最近是我たちのライフサイクルの中でバイオマス問題が新エネルギー資源として注目を集め、各自治体でもバイオマスを活用したまちづくりを推進する機運が盛り上がってきていることも見逃せない。

一方、農業問題の末端では食品のロス率（廃棄や食べ残し量を食品使用量で割った率）が依然として高いことも気懸かりだ。食品表示の違反問題も含めて日本人的「もったいない思想」を連結させながら、食の安心・安全社会実現のシステムを早急に構築してもらいたいのだ。活字ファンにとっては「アグリート」の休刊は残念というほかないが、農水省や政治の人たちは日本農業の将来のあり方を真剣に考え、営農者も消費者もともにハッピーになる新手の方策を編み出してほしい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）